

## 〔5〕 釈尊の葬儀と第一結集に関するエピソードの検討

〔0〕 釈尊の葬儀と、その直後に行われた第一結集における摩訶迦葉の事績についての資料には、原始仏教聖典 (A 文献) の《1》と《37》と、後期仏教聖典 (B 文献) の《1》と《37》がある。

以下においてはこれらを材料にして、摩訶迦葉の果たした役割やその意味、あるいは時系列的な問題を検討してみたい。しかしこれはあくまでも摩訶迦葉研究の一環として行うものであって、釈尊の葬儀や第一結集に関する総体的な研究ではないから、摩訶迦葉に係わる事柄のみを取り上げるものであることを了解されたい。なお前述したように、資料番号のみでは文献の種類がわからないのでポイントを下げた文献名をのみ記しておいた。文献の種類が当該資料の信頼度に大きく関わるからである。

また以下には大乘経論や中国撰述の文献 (C 文献) も紹介するが、これらはあくまでも副次的な資料にすぎないので、文字のポイントを落として記した。

〔1〕 まず釈尊の葬儀に当たって摩訶迦葉の果たした役割を、A 文献に含まれる資料をもとに考えてみたい。

摩訶迦葉が釈尊の入滅を知ったシーンは次のように記されている。必要な事項については先に紹介した資料に補填して、できるだけ正確に要点をまとめてみると次のようになる。

〔1-1〕 摩訶迦葉が一人の修行者に遭って釈尊の入滅を知ったシーンは次のように表現される。

〈1-1〉 *DN.* ; パーヴァーからクシナーラーに向かう道を進んでいるところで (*Pāvāya Kusināraṃ addhāna-magga-paṭipanno hoti*)、クシナーラーからパーヴァーに至る道を進んでいた (*Kusinārāya mandārava-pupphaṃ gahetvā Pāvāya addhāna-maggapaṭipanno hoti*) 邪命外道に遭った。

〈1-2〉 『長阿含』 ; 波婆國から来る道で、拘尸城からやって来た邪命外道に遭った。

〈1-3〉 『仏般泥洹經』 ; 来還する途中で、那竭國からやって来る異學者の優爲と名づける者に遭った。

〈1-4〉 『般泥洹經』 ; 波旬から来る道の半ばで、異道士の阿夷維と名づける者に遭った。

〈1-5〉 『大般涅槃經』 ; 摩訶迦葉は鐸叉那耆利國で遥かに如來が鳩尸那城で般涅槃されようとしているのを聞いてやって来る途中の「去城不遠」ところで、鳩尸那城からやってきた一人の外道に遭った。

〈1-6〉 *Mahāparinirvāṇasūtra* ; まだ手をつけられていない師の遺体を拜もうと願って (*bhagavato śarīram avigopitaṃ vanditukāmaḥ*)、パーパーからクシナガリーに至る大道を歩いていたときに (*antarā ca Pāpām antarā ca Kusinagarim atrāntarādhvapatipanno*)、反対方向からやってきた (*pratimārgam*) 邪命外道に遭った。

〈1-7〉 *Vinaya* ; パーヴァーからクシナーラーに向かう道を進んでいるところで (*Pāvāya Kusināraṃ addhāna-magga-paṭipanno hoti*)、クシナーラーから曼陀羅華を持ってパーヴァーに至る道を進んでいた (*Kusinārāya mandārava-pupphaṃ gahetvā*)

Pāvaṃ addhāna-magga-ṭṭipanno hoti) 邪命外道に遭った。

〈1-8〉 『四分律』；波婆城と拘尸城の両国の中間で、一人の尼犍子に遭った。

〈1-9〉 『五分律』；波旬国から拘夷城に向かう途中で世尊がすでに般泥洹されたことを聞いた。

〈1-10〉 『十誦律』；波婆城から拘尸城に至る二城の中間で、拘尸城から波婆城に行こうとしている一人の梵志に遭った。

〈1-11〉 『僧祇律』；その時大迦葉は耆闍崛山の賓鉢羅山窟で坐禅をしていたが、世尊が寿命を捨ててどこで般涅槃されようとしているのであろうか、今どこで安楽に住されているだろうかと天眼をもって世界を観察し、すでに入滅されて闍維しようとしても火が燃えないことを知った。そこで遺体を敬礼しようとして、神通力を使うのはよくないからと徒歩で、多くの長老比丘とともに拘尸那竭に行った。

この中には必ずしも明確に表現されていないものもあるが、摩訶迦葉が釈尊の入滅を知ったのは多くはパーヴァーからクシナーラーへ行く道の途中であったということで共通している。

しかし摩訶迦葉が釈尊の入滅を知った時点を、〈1-11〉は「耆闍崛山の賓鉢羅山窟で坐禅をしていた時」とするのは注目してよいであろう。そして〈1-5〉は「鐸叉那耆利國で遙かに如來が鳩尸那城で般涅槃されよう（欲般涅槃）としているのを聞いてやって来る途中」というのであるから、修行者に遭った時点においては、少なくとも釈尊が入滅されようとしていることを知っていたことになる。〈1-6〉も「まだ手をつけられていない尊師の遺体を捧もうと願ってパーヴァーからクシナーラーに至る大道を歩いていたときに」というのであるから、これも釈尊の入滅をすでに知っていたことになる。しかもそれを知ったのは〈1-11〉は王舎城においてであり、〈1-5〉の「鐸叉那耆利國」がどこを指すのかは分からないが、「遙かに聞いた」というのであるから、近くではなかったであろう。

『涅槃經 (Mahāparinibbāna-suttanta)』では、釈尊は生涯最後の雨安居を終えられた後に、ヴェーサーリーに比丘たちを集めて、3ヶ月後に入滅することを宣言されたとされているから<sup>(1)</sup>、実は誰でも釈尊の入滅の近いことを知りうる環境にあったということになる。もしこれが説話的な表現であるとするなら、釈尊は重い病気にかかられた後でもあり、入滅の時期が近づいていたことは誰にでも容易に推測できるような状態であったということを表すであろう。

このように考えると、摩訶迦葉はパーヴァーからクシナーラーへ向かう道を偶然に進んでいて、そこで偶然に釈尊が7日前に亡くなったことを知ったのではなく、すでに釈尊の死期が近いことを知っていて、死期の近い釈尊に会おうとして、パーヴァーからクシナーラーへ向かう道を進んでいたということになるであろう。〈1-11〉がすでに亡くなったことを王舎城にいたときに天眼によって知ったというのはその説話化であろう。

釈尊が3ヶ月後に入滅することを宣言されたのは遊行に出られる直前のことであったから<sup>(2)</sup>、次の目的地はクシナーラーであることが決定していて、だから摩訶迦葉には目指すべき場所がクシナーラーであることはわかっていたのであろう。弟子たちは雨安居の前後に釈尊に会いに行くことが習慣となっていたから<sup>(3)</sup>、釈尊は次の雨安居地を少なくとも、1年前には決められているのが常であったからである。だから〈1-11〉がその所在を神通力で知っ

たというのも説話化である。

[1-2] このことは摩訶迦葉が釈尊の般涅槃を知ったときの、修行者との問答によっても推測することができる。このとき摩訶迦葉は次のように問いかけている。

〈1-1〉 *DN.* ; 「君よ、私たちの師のことを知っていますか (*āvuso amhākaṃ satthāraṃ jānāsi*) 」

〈1-2〉 『長阿含』 ; 「汝知我師乎」「我師存耶」

〈1-3〉 『仏般泥洹経』 ; 「識吾大師佛不」

〈1-4〉 『般泥洹経』 ; 「子知我所事聖師佛乎」

〈1-5〉 『大般涅槃経』 ; 「汝知我師應正遍知不」

〈1-6〉 *Mahāparinirvāṇasūtra* ; 「アージーヴィカよ、あなたは我が師のことを知っていますか (*jāniṣe tvam ājīvika mama śāstāram*) 」

〈1-7〉 *Vinaya* ; 「君よ、私たちの師のことを知っていますか (*āvuso amhākaṃ satthāraṃ jānāsi*) 」

〈1-8〉 『四分律』 ; 「識我世尊不」

〈1-9〉 『五分律』 ; 該当する記述なし

〈1-10〉 『十誦律』 ; 「汝識我大師不」

〈1-11〉 『僧祇律』 ; 該当する記述なし

そしてその答えが、「知っている。7日前に般涅槃されました。だからこの曼陀羅華を持っているのです」というのであるから、決して漠然と釈尊のことを知っているかと問いかけたのではなく、もっと具体的に死期の近い釈尊のその時の様子を尋ねたものであったことがわかる。このように摩訶迦葉は釈尊の入滅の近いことを知って、釈尊に会うためにパーヴァーからクシナーラーに行く途中で、すでに入滅されてしまったことを知ったのである。

[1-3] それでは摩訶迦葉は釈尊の入滅が近いことを伝え聞いたので、個人的な意志で釈尊に会おうとクシナーラーにやって来たのであろうか。恐らくそうではないであろう。上記資料では等しくマツラ族の人々が釈尊の遺体を荼毘に付そうとしたとき、火がつかなかったことを記している。そして火がつかなくなった理由が次のように記されている。

〈1-1〉 *DN.* ; 阿那律はマツラ族の人々に「尊者摩訶迦葉が世尊の足を頂礼しない間は火を点じられないようにしようという、天人たちの意向 (*devatānam adhippāyo*) だからです」と解説した。

〈1-2〉 『長阿含』 ; 阿那律は末羅の人々に「是諸天意。天以大迦葉將五百弟子從波婆國來今在半道、及未闍維欲見佛身。天知其意故火不燃」と解説した。

〈1-3〉 『仏般泥洹経』 ; 阿那律は理家に「佛有耆舊弟子名大迦葉。周行教化今者來還將弟子二千人。諸天無央數欲完見佛令火不燃」と解説した。

〈1-4〉 『般泥洹経』 ; 阿那律は阿難に「是諸天意。見大迦葉將五百衆從波旬來已在半道、欲面禮佛故使火不燃耳」と解説した。

〈1-5〉 『大般涅槃経』 ; 阿菟樓駄は人々に「言所以然者尊者摩訶迦葉在鐸叉那耆利國、聞於如來欲般涅槃。與五百比丘從彼國來欲見世尊。是以如來不令火然」と解説した。

〈1-6〉 *Mahāparinirvāṇasūtra* ; アニルツダは阿難に「摩訶迦葉が師主の遺体がまだ覆われないうちに礼拝したいと願っている (*bhagavato śārīram avigopitaṃ vanditukāmaḥ*) の

をかなえさせようという天たちの意向 (devatānām abhiprāyaḥ) だからです」と解説した。

〈1-7〉 *Vinaya* ; 該当する記述なし

〈1-8〉 『四分律』 ; 阿那律が末羅子に「摩訶迦葉在波婆拘尸城兩國中間在道行。與大比丘衆五百人俱。彼作是念。我當得見未燒佛舍利不耶。諸天知迦葉心如是念。以是故滅火」と解説した。

〈1-9〉 『五分律』 ; 該当する記述なし

〈1-10〉 『十誦律』 ; 大迦葉は四衆を使いによつて、「我正爾當到。莫燃佛積。我欲禮佛全身」と命じた。

〈1-11〉 『僧祇律』 ; 諸天使火不然。待尊者大迦葉故。

これら資料の多くは、荼毘の火がつかなかったのは天人たちが、摩訶迦葉の釈尊の完全な遺体を礼拝したいという願いをかなえさせてやりたいという意向を持ったからだとしている。要するに葬儀は摩訶迦葉が到着しない間は始められなかったということであつて、摩訶迦葉の到着を待っていたという説話的な表現であろう。

もしこのように、クシナーラーで釈尊の葬儀を執り行おうとしていた人々が摩訶迦葉を待っていたとするなら、彼らは摩訶迦葉がやがてやってくるであろうことを知っていたということになる。

それでは彼らはなぜ摩訶迦葉が来ることを知っていたのであろうか。風の便りということもあるであろうが、情報は足で運ばれる外に方法がない時代においては、クシナーラーに行こうと急いでいた摩訶迦葉たちよりも先に風の便りが届くとは考えられない。したがって彼らはかなり早くから摩訶迦葉がやってくることを知っていたと考えるほうが自然である。あるいは〈1-10〉が言うように摩訶迦葉が自分が到着するまで待たせていたという側面があつたかも知れない。〈1-11〉が闡維する(荼毘に付す)のは「世尊の長子である自分だ」とするものもこれに通じるであろう。

[1-4] 以上のように、摩訶迦葉は師の死に目に会いたいと旅を急いでいた。一方クシナーラーの人々は、葬儀を執行するために摩訶迦葉の到着を待っていた。

これは摩訶迦葉と待つ者たちの双方に、摩訶迦葉が釈尊の葬儀において葬儀委員長的な役割を果たすべきことが共通認識として成立していたということを表すであろう。葬儀は在家信者の手によって行われたのであるから、葬儀委員長が適当でないとすれば、喪主が不在では始められないと同様の事情にあつたのではなからうか。しかし釈尊は出家であつたのであるから、実子であるラーフラが存命であつたとしても<sup>(4)</sup>、登場する場面ではなかつた。要するに血脈よりも、法脈が優先されているわけである。したがって喪主も不適當だとすれば、遺弟の代表ということになる。それが摩訶迦葉であることが双方共に認識されていたのである。これは摩訶迦葉が釈尊の遺法を確認しあつた第一結集の主催者となつたということをも勘案しても首肯しうるであろう。ただしこれがすべての比丘たちの認めるところであつたかどうかは、この後に自ら出家のいきさつを弁明しなければならない事態が生じていることも見ても、疑問が残る。これについては後に詳述したい。

伝承では〈1-1〉 〈1-2〉 〈1-3〉 〈1-4〉 〈1-5〉 〈1-11〉 など多くの資料において、摩訶迦葉が到着して釈尊の足を礼拝すると自然に火がついたとする。東洋大学の橋本泰元教授

のご教示によると、現代のヒンドゥー教徒の葬儀では、遺体をガンガーの岸辺で火葬にふす際に、喪家から遺体を経帷子に包んで竹で作った担架に載せて岸辺に運び、そのまま遺体の下半身をガンガーの水につけておく。これは現代ヒンディー語では「半分の水の所作」(ardha jala kriyā) と呼ばれる。遺体を運んだ男性の親族と喪主が、手でガンガーの水を掬って遺体の上半身に灌ぎ遺体を沐浴させ、それから火葬儀が開始されるという<sup>(5)</sup>。この民俗の歴史性は確認していないというが、釈尊の葬儀とこの民俗には何らかの関係があることが想像されうる。ということになれば、摩訶迦葉はまさに喪主的な役割を果たしたことになる。

このように待つ方も道を急ぐ方もその双方が、彼がいなくては葬儀は始められないことを認識して、その到着を待っていた。彼らは互いに事前に連絡を取りあっていたのであろうが、情報の伝達はままにならない古代のことであったから、双方ともに直近の互いの状況がわからないので、気をもんでいたのである。

[1-5] このようにもし連絡を取りあっていたとするなら、この相互の連絡はいつごろから始められたのであろうか。それはおそらく、釈尊が3ヶ月後に入滅されると宣言され、クシナーラーに向けて出発された時ではなかったであろうか。おそらく誰かが摩訶迦葉に至急クシナーラーに来てほしいという要請を出したのであろう。それは後に検討するように釈尊と摩訶迦葉の間柄のことを知り、またそばにいて釈尊の意のあるところを知りうる立場にあった阿難であった可能性が高い。

その知らせが摩訶迦葉に届いたときには、〈1-11〉がいうように彼は王舎城にいたかも知れない。後に考察するように、王舎城は摩訶迦葉の主な活動地であったことから首肯される。彼は知らせを聞いてすぐに出発したとしても、王舎城からクシナーラーへはヴェーサーリーを経由するのがもっとも自然であるから、釈尊が遊行された距離のおよそ倍もあるし、後に考察するように摩訶迦葉は釈尊よりもかなりの年配で、したがってその時には極めて高齢となっていた。急ぎに急いだけれども釈尊の入滅には間にあわなかった、ということであろう。

この時点では舍利弗・目連はすでに亡くなっていたとされるから<sup>(6)</sup>、その分を差し引いたとしても、釈尊の葬儀に関連して語られる摩訶迦葉のこれらのエピソードは、第一結集のエピソードとともに、摩訶迦葉が釈尊の弟子たちの中では特別の存在で、その代表格であったことを物語る。どういう事績によって摩訶迦葉がこのような位置に位置づけられるようになったかについては、追々に考察していきたい。

[1-6] また、荼毘の火がつかない理由を摩訶迦葉が来るのを天たちが待っているのだという解説を阿難が行ったのではなく阿那律が行ったということ、あるいは阿那律が阿難に解説したということは、葬儀を待たせたのは阿難ではなく阿那律であったということを物語るかも知れない。

そうすると、もし阿那律も釈尊が入滅を宣言されたときにヴェーサーリーにいたとすると、摩訶迦葉にすぐに来て下さいというメッセージを送ったのは阿那律であったかも知れない。阿那律は釈迦族の出身で、阿難が出家したときに一緒に出家したとされる人物であるから、釈尊の最後の遊行に際して、阿難と行動を共にしていたという可能性も十分に存する。

(1) DN. 016 'Mahāparinibbāna-s.' (vol. II p.119)、『長阿含』002「遊行経」(大正01

p.016 中)、白法祖訳『仏般泥洹経』(大正 01 p.164 下)、失訳『般泥洹経』(大正 01 p.180 中)、法顕訳『大般涅槃経』(大正 01 p.191 下)、*Mahāparinirvāṇasūtra* (p.202)

- (2) *DN.* 016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.122) では、釈尊は3ヶ月後に般涅槃に入ること宣言された直後に、ヴェーサーリーに乞食に入られて、これが最後のヴェーサーリーの眺めだと嘆息され、Bhaṇḍa 村に出発されたことになっている。他の経も略同じである。
- (3) これについては別稿を用意しているので、詳細はこれをお待ちいただきたいが、取りあえずは拙稿の「プロジェクト『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』中間報告」(『藝林』52 巻第1号 藝林会 2003年4月)を参照いただければ幸いである。
- (4) *DN.-A.* (vol. II p.549)、*SN.-A.* (vol. III p.172)によれば、ラーフラは釈尊・舎利弗よりも先に般涅槃していたとされる。
- (5) 「ヒンドゥー教における霊魂観(上)——最期の供養——」(田中純男編『死後の世界——インド・中国・日本の冥界信仰』所収 東洋書林、2000年)
- (6) *SN.*047-013 (vol. V p.161)、『雑阿含』638 (大正 02 p.176 中)、*SN.*047-014 (vol. V p.163)、『雑阿含』639 (大正 02 p.177 上)、『増一阿含』026-009 (大正 02 p.639 上)、*Jātaka* 522 ‘Sarabhaṅga-j.’ (vol. V p.125)、『四分律』「衣捷度」(大正 22 p.865 中)、『根本有部律』「雑事」(大正 24 p.402 下)、『僧伽羅刹所集経』(大正 04 p.142 中)。ただしパーリの『涅槃経』には舎利弗が登場する。しかし相応する漢訳やサンスクリット本の相当箇所には記述がない。

[2] 今まで考察したことをB文献で検証してみよう。しかしB文献はあくまでも第2次的な資料に止まるから、[1]で行ったような資料の網羅的な検討は行わない。筆者が取り上げるべきだと判断するもののみを検討する。もちろんその取り上げるべきものは上記の記述に反するものも含まれる。

[2-1] まず摩訶迦葉が釈尊の入滅を知った場所については、〈1-1〉『根本有部律』「雑事」は王舎城羯蘭鐸迦池竹林園であったとする。これはA文献の〈1-11〉『僧祇律』と等しい。もちろん知らせがあったからというのではなく、大地が揺れ動いたのを観察して知ったのである<sup>(1)</sup>。また〈1-3〉『仏所行讃』は荼毘の火がつかなかった理由を、大迦葉が先に王舎城にいたとき仏が涅槃に入れようとしているのを知って、世尊の身体を見たいと願っていたので燃えなかったからとしている。これらは両者とも、摩訶迦葉が王舎城にいたときに、釈尊が入滅されたこと、ないしは入滅されようとしていることを知って、クシナーラーに駆けつけたとするわけである。

[2-2] B文献も等しく摩訶迦葉が到着しない間は荼毘の火がつかなかったとしている。摩訶迦葉が遺弟代表のような役割を果たすべき人物であったという理解を継承しているわけである。中国文献では、『釈子稽古略』(大正 49 p.754 上)が摩訶迦葉が耆闍崛山にいたとき、世尊の入滅を知ったとしている。

[2-3] 以上のように、当然のことながらB文献もC文献もA文献の伝承を継承している。要するに、摩訶迦葉は偶然にパーヴァーからクシナーラーに向かっていたのではなく、釈尊の入滅の近いことを知って駆けつけようとしていたのであり、クシナーラーではその到着を待っていたということである。摩訶迦葉が葬儀委員長ないしは喪主代表のような役割を有していたと想像することを否定する材料はない。

[3] もし摩訶迦葉がそういう役割を果たすべきものと認識されていたとするなら、一般的には彼がもっとも法臘が高かったと解釈されるべきであろう。サンガの中の唯一のヒエラルヒーは法臘であったからである。

[3-1] しかしながら A 資料の〈1-6〉 *Mahāparinirvāṇasūtra* は「その時地上には 4 人の大長老 (catvāro mahāsthavirā)、すなわち阿若橋陳如 (Ājñātakauṇḍinya)、大均陀 (Mahācunda)、十力迦葉 (Daśabalakāśyapa)、摩訶迦葉 (Mahākāśyapa) がいた」が、「わたし自身だけが尊師の遺体の崇拝を熱烈に行うことにしよう」と考えて、薪の堆積の傍らに坐ったら、薪にひとりで火がついた、とする<sup>(1)</sup>。〈1-10〉『十誦律』も、長老阿若橋陳如が第一上座で、長老均陀が第二上座、阿難の和上の長老十力迦葉が第三上座で、長老摩訶迦葉が第四上座であったとする。しかしそのすぐ後に「摩訶迦葉多知廣識。四部衆盡皆恭敬信受其語」と、法臘に拘わらず摩訶迦葉が葬儀の主役になった理由を説明している。そして四部衆を使いに出して、釈尊の遺体に火をつけることを止めさせたとする。

B 文献の〈1-1〉『根本有部律』「雜事」は「この時四大耆宿聲聞があり、具壽阿若橋陳如と具壽難陀と具壽十力迦攝波と具壽摩訶迦攝波であったが、摩訶迦攝波は大福德多獲利養。衣鉢藥直觸事有餘であった。そこで摩訶迦攝波は我今自辨供養世尊と考えると、金棺に香木を積むと自然に火がついた」とする。「耆宿聲聞」すなわち法臘順としては、摩訶迦葉は阿若橋陳如・難陀・十力迦攝波に次ぐ者であったが、「大福德多獲利養。衣鉢藥直觸事有餘」であるから葬儀委員長になったとするわけであり、〈1-10〉に等しい。

これらの間には若干の人名の食い違いがあるが、しかし法臘では摩訶迦葉は必ずしも最上座ではなかったことを語っているわけであって、しかし多知廣識で大いなる福德があったから遺弟代表のような務めを果たすことになったとするわけである。

法臘順については摩訶迦葉が具足戒を受けた年次とも関係するので、詳しい考察は【6】において行いたい。また摩訶迦葉に備わっていたとされる法臘を超越した「多知廣識」で「大いなる福德」なるものが、原始仏教聖典においてどのように伝承されているかについては、主に【7】【8】で考察することにしたい。

(1) 『遊行経 下』(中村元著 大蔵出版社 昭和 60 年 2 月) p.760

[4] 上記の考察に基づいて時間的な経過を考えておきたい。

『涅槃経』の記述によると、釈尊は最後の雨安居をヴェーサーリーの近郊の竹林村 (Veḷuvagāma) で過ごされた。その年はヴェーサーリーが飢饉で、大勢の比丘たちがそこで雨安居を過ごすことができなかったからである。雨安居は 4 月 16 日に始まるが<sup>(1)</sup>、その前日の 4 月 15 日に釈尊は満 80 歳の誕生日を迎えられた。当時の習慣では入胎を誕生日とし、4 月 15 日がその日に当たるからである<sup>(2)</sup>。その時に死に至るほどの病気をされ、「阿難よ、私は年老い、老衰し、高齢で、人生の終わりに達し、齡傾いてすでに 80 である (ahaṃ kho paṇ' Ānanda etarahi jiṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto, asitiko me vayo vattati.)」<sup>(3)</sup>と嘆かれた。しかしこの時は氣力を振り絞って病気を克服された。

雨安居は前・後の 4 ヶ月が過ごされたと考えられるので、8 月 15 日が出雨安居の日となる。迦絺那衣の期間を経て衣を整えた比丘たちが、雨安居期間中に検討された新しい波羅提

木叉や制度の改革に関する指示を受けに来たり、心境の高まりを釈尊に確認してもらいに来たりするので、釈尊はその後の3ヶ月ほどは雨安居を過ごされた土地に止まられるのが常であった。しかしこの年は竹林村という小さな村で雨安居を過ごされたので、ここでは大勢の比丘たちがやって来るのを受け入れられないから、雨安居を終えられた釈尊はヴェーサーリーに戻っておられたかも知れない。

そして11月15日ころに、近郊に住んでいた比丘たちをヴェーサーリーに呼び集めて、3ヶ月後に入滅すると宣言された。弟子たちはこの時に、釈尊の死期が近いことを知ったわけである。これは次の雨安居を過ごす目的地に出発する日のことであった。3ヶ月後というのは2月15日に当たり、これはおおよそ次の雨安居地に入られる時期にあたる。このことからその時の遊行の目的地はクシナーラーと決められていたことがわかる。死期を予感された釈尊は、生れ故郷を懐かしんで、カピラヴァットゥに向けて出発されたと推測する向きもあるが、それは出家者である釈尊の心境を貶めるものであろう。また釈尊は気まぐれに遊行されたのではなく、きちんとその行き先を定められていた。目的地を定めないで行き当たりばつたりに遊行されたのでは、弟子たちが何時どこに行ったら釈尊に会えるか分からなくなって、右往左往しなければならないからである。だから「涅槃経」のあるものは入滅の宣言を「是より後三ヶ月、本生の處、拘尸那竭娑羅園双樹の間に於て當に滅度を取るべし」<sup>(4)</sup>とするのであり、これも蓋然性があるものと考えられる。

摩訶迦葉はその年の雨安居を王舎城で過ごした。先に紹介したようにいくつかの伝承がそれを伝えるが、【10】において考察するように、摩訶迦葉の主な活動舞台は王舎城周辺であり、だからこそ彼の主宰した結集も王舎城で行われた。王舎城にいた摩訶迦葉に釈尊が3ヶ月後に入滅するという宣言が伝えられたのは、それから数日が経過したときであった。12月の初めと推測しておこう。その知らせの中には、恐らく阿難あるいは阿那律からの至急クシナーラーに出発されたいという要請も含まれていたであろう。

摩訶迦葉はすぐさま出発したが、王舎城からクシナーラーまでは現在の道路距離で345キロほどの道のりである。ヴェーサーリーからクシナーラーまでは188キロであるから<sup>(5)</sup>、釈尊が遊行された距離のおおよそ倍の距離ということになる。しかも後に考察するように、摩訶迦葉は釈尊よりも10歳余の年長であったと考えられるから、摩訶迦葉自身もそう迅速には動けなかった。クシナーラーでは摩訶迦葉が到着するのを今か今かと待ち焦がれていたし、摩訶迦葉は摩訶迦葉で釈尊がどうされたか気が気ではなかった。しかしついに釈尊の入滅には間にあわなかった。そういう事情があって、葬儀の執行が待たれていたのである。

- (1) 古代の中国歴に基づく。現在の暦では大体7月上旬に相当する。詳しくは本「モノグラフ」第1号に掲載した【論文2】「原始仏教時代の暦法について」を参照されたい。
- (2) これについては同じく本「モノグラフ」に掲載した【論文3】「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」を参照されたい。
- (3) DN. 016 'Mahāparinibbāna-s.' (vol. II p.100)
- (4) 長阿含 002「遊行経」(大正 01 p.015 下)
- (5) このコースは、ヴェーサーリーを出てすぐに現在のガンダック河を渡り、現在のビハール州の Saran 県と Siwan 県を通る道を想定している。多くの学者はガンダック河の左岸を遡って Champaran 県で河を渡ったと想定されているようであるが、われわれはこれを取らない。これについてもいずれは文章にして発表したいと考えている。

[5] 次に第一結集のエピソードにおいて摩訶迦葉がどのような役割を果たしたかということとその意味を考えてみたい。

[5-1] まず第一結集を行うようになった経過を A 文献の資料について調査してみよう。それがスバダ (Subhadda) の暴言をきっかけにしていることはそれほど議論を必要としないので省略する。ただし摩訶迦葉がどのような手続を踏んでこの結集を執り行うようになったかについては、摩訶迦葉の釈尊教団の中の位置を考えるうえで重要であるので、まずこれを取り上げたい。

第一結集を伝える資料は《37》であって、それぞれは次のように言う。摩訶迦葉の役割とその手続きを中心に紹介する。

(37-1) *Vinaya* ; 長老比丘たちは摩訶迦葉に 500 人の比丘を選定させた。しかし 500 に 1 を欠いた。比丘たちは阿難はまだ有学であるが世尊にしたがって多く法と律を学んだからと推薦し、摩訶迦葉は阿難をも選定した。長老比丘たちは「王舎城は行乞するところ多く、臥坐処が豊富である (Rājagahaṃ kho mahāgocaraṃ pahūtasenāsaṇaṃ) から王舎城において雨安居を住し、法と律を結集しよう。余の比丘らは王舎城に雨安居に来させないようにしよう」と考えた。そこで摩訶迦葉はサンガに「この 500 人を選んで王舎城において雨安居に住し法と律を結集しよう」と提案して、白二羯磨によって決定された。

(37-2) 『四分律』; 諸長老は多聞智慧の阿羅漢を 499 人選んだ。そして阿難をその中に入れようとした。大迦葉は「阿難有愛恚怖癡」として反対したが、比丘たちは「阿難是供養佛人常隨佛行、親從世尊受所教法」と主張して加えられた。諸比丘は「唯王舎城房舍飲食臥具衆多。我等今宜可共往集彼論法毘尼」と考えた。そして「時大迦葉即作白。大徳僧聽。此諸比丘爲僧所差。若僧時到僧忍聽。僧今往王舎城集共論法毘尼。白如是。作白已。俱往毘舍離」とされている。「若僧時到僧忍聽」とされているから、白二羯磨で決定されたのであろう。

(37-3) 『五分律』; 世尊が涅槃に入られてからまだ久しからざるとき、大迦葉は毘舍離彌猴水邊の重閣講堂に大比丘僧五百人と共にいた。結集することに決して、そこで諸比丘は迦葉に「阿難常侍世尊聰叡多聞具持法藏。今應聽在集比丘數」と言った。迦葉は「阿難猶在學地。或隨愛恚癡畏不應容之」と反論した。阿難は発奮して阿羅漢になった。そこで迦葉も阿難を加えることを承認した。迦葉は「何許多有飲食床坐臥具、可得資給集比尼。唯見王舎城足以資給」と考え、これを「於僧中唱言」した。このようにここでは王舎城で雨安居に住して結集を行うことは、ヴェーサーリーにおいて決定されたことになっており、その議決方法は単白羯磨であったように理解される。

(37-4) 『十誦律』; 摩訶迦葉は経律論を結集しようと考えて、「僧中作羯磨」してこれを決定した。そして五百少一比丘を選び、これも(白二?)羯磨して決定した。しかし「是阿難好善學人。佛說阿難於多聞人中第一。我等今當使阿難作集法人」と考えて、白二羯磨によって阿難を加え、さらに安居することも(単白?)羯磨して決定した。摩訶迦葉は「王舎城中四事供養具足無乏國土安隱無諸賊寇。我等今當往到王舎城安居」と考えて、摩訶迦葉は一人で先に王舎城に行って精舎を整備し、安居の準備をした。

〈37-5〉 『僧祇律』；釈尊の荼毘がすんで迦葉は法藏を結集しようと考えて「尋復議言」して、「我等宜應何處結集法藏」と言った。舎衛・沙祇・瞻婆・毘舍離・迦維羅衛などという意見があったが、大迦葉は「世尊記王舎城韋提希子阿闍世王聲聞優婆塞無根信中最爲第一。又彼王有五百人床臥供具。應當詣彼」と提案して賛成された（皆言爾）。

〈37-6〉 『仏般泥洹經』；該当する記述はない

〈37-7〉 『般泥洹經』；該当する記述はない

〈37-8〉 『大般涅槃經』；該当する記述はない

以上から知られる通り、第一結集に関するすべての事項はサンガの議決方法の原則である「羯磨」（白二羯磨ないしは単白羯磨）にしたがって行われたものと考えられる。だからこそここれらの伝承は「律藏」に残されたのである。また以上から、会議（羯磨）の議長役は摩訶迦葉であって、ほとんどがこの摩訶迦葉の意向にそって進められたということも推測される。これは摩訶迦葉が釈尊の葬儀において遺弟代表を務めた流れの中にあっただからでもあろう。

[5-2] この議決の行われた場所を〈37-3〉はヴェーサーリーにおいてであったとしている。〈37-2〉は500阿羅漢はクシナーラーで王舎城において結集を行うことを決定してから毘舍離（ヴェーサーリー）に行き、そこで阿難は阿羅漢果を得て、そこから王舎城に行ったとしている。釈尊も王舎城からヴェーサーリーに行かれ、その近郊の竹林村で雨安居を過ごされてからクシナーラーに遊行されて入滅された。このようにクシナーラーと王舎城を結ぶ通常のルートはヴェーサーリーを経由するものであって、この時にもそのルートを取ったのであろう。〈37-5〉は「釈尊の荼毘がすんで」としているからクシナーラーにおいて行われたことを示すのであろう。他は明示しない。

しかしこの羯磨はクシナーラーで行われたと考えるのが自然である。釈尊の葬儀には多くの比丘が集まったであろうから、釈尊の遺法を結集することを決する羯磨を行う場所と時期はこの時がもっともふさわしいと言わなければならない。

[5-3] またこの結集は雨安居に住して行われた。〈37-2〉のみはその時期を明記しないが、王舎城で「先當治房舎臥具。即便治房臥具」としているから、これは雨安居の準備をしたということであろう。〈37-3〉は結集を「夏の初月において房舎・臥具を補治し、2月に諸禪解脱に遊戲し、3月に一処に集まった」としている。夏の初月は4月16日から始まる1ヶ月で、2月は5月16日から始まる1ヶ月、3月は6月16日から始まる1ヶ月を指す。

恐らくこの雨安居は釈尊が入滅された年の雨安居であったであろう。釈尊は2月15日に亡くなっており、雨安居は4月16日に開始されたすると、慌ただしい日程になったものと想像される。ただしこれ以上のことは不明であり、これについては後にB文献を参考にしてより詳しく考察する。

[5-4] 次に第一結集がどのように行われたかということ进行调查してみたい。しかし結集によって何が編集されたかということについてはすでに多くの優れた研究があるので<sup>(1)</sup>、ここではその議事進行の過程における摩訶迦葉の果たした役割を重点的に見てみたい。

〈37-1〉 *Vinaya*；摩訶迦葉はサンガに議事を告げた (*saṃghaṃ nāpesi*)。「サンガよ我が言を聞け (*suṇātu me āvuso saṃgho*)、もしサンガに機が熟したなら、私はウパーリに律を問おう (*yadi saṃghassa pattakallaṃ, ahaṃ Upāliṃ vinayaṃ puccheyyaṃ*)」

というように始まった。以下経蔵の結集が続く。

〈37-2〉『四分律』；「時大迦葉知僧事即作白。大徳僧聽、若僧時到僧忍聽。僧今集論法毘尼。白如是」というように始まった。以下経蔵の結集が続く。

〈37-3〉『五分律』；「迦葉白僧言。大徳僧聽、我今於僧中問優波離比尼義。若僧時到僧忍聽。白如是」というように始まり、「迦葉作如是等問一切比尼已。於僧中唱言。此是比丘比尼。此是比丘尼比尼。合名爲比尼藏」というように終わった。以下経蔵の結集が続く。

〈37-4〉『十誦律』；「摩訶迦葉爲敷法座。優波離比丘昇高座坐竟。摩訶迦葉問優波離。初波羅夷因縁從何處出。優波離答言」というように始まった。これによれば羯磨にしたがって始められたようには読めないが、しかし最後に「爾時長老迦葉僧中高聲大唱。大徳僧聽、如是一切毘尼法集竟。是法是毘尼是佛教。無有比丘言。是法言非法。非法言是法。是毘尼言非毘尼。非毘尼言是毘尼。是法是毘尼是佛教。僧忍默然故。是事如是持」とされているから、羯磨によってなされたことがわかる。以下経蔵・論蔵の結集が続く。

〈37-5〉『僧祇律』；「時尊者大迦葉問衆坐言、今欲先集何藏。衆人咸言、先集法藏。復問言、誰應集者。比丘言、長老阿難。阿難言不爾。更有餘長老比丘又言、雖有餘長老比丘但世尊記汝多聞第一、汝應結集。阿難言、諸長老若使我集者如法者隨喜、不如法者應遮。若不相應應遮。勿見尊重而不遮。是義非義願見告語。衆皆言、長老阿難汝但集法藏。如法者隨喜、非法者臨時當知。時尊者阿難即作是念、我今云何結集法藏。作是思惟已便説經言。如是我聞一時佛住鬱羅羅尼連河側菩提曼陀羅……」というように経蔵が結集され、続いて律蔵が結集された。

〈37-6〉『仏般泥洹經』；該当する記述なし

〈37-7〉『般泥洹經』；「大迦葉・阿那律・衆比丘會共議佛十二部經」

〈37-8〉『大般涅槃經』；「迦葉共於阿難及諸比丘於王舍城結集三藏」

このように結集にあたっては摩訶迦葉が羯磨の主導役を勤めたことは明らかである。

[5-5] なお結集の時の法臘順を、〈37-2〉は「陀醯羅迦葉が上座、長老婆婆那が第2上座、大迦葉が第3上座、長老周那が第4上座となり、大迦葉が僧事をつかさどって法毘尼を論じることになった」としている。また〈37-3〉は長老阿若橋陳如爲第一上座。富蘭那爲第二上座。曇彌爲第三上座。陀婆迦葉爲第四上座。跋陀迦葉爲第五上座。大迦葉爲第六上座。優波離爲第七上座。阿那律爲第八上座とし、摩訶迦葉を第1上座とはしない。摩訶迦葉を第1上座とするのは〈37-5〉のみで、大迦葉は第1上座で、長老槃頭盧は第2上座、優波那頭盧は第3上座とする。

結集も摩訶迦葉が羯磨師となって議事を進行したにかかわらず、摩訶迦葉が第1上座であったとするのは少数派である。釈尊の葬儀を考察した際にも触れたがこれは不可解というほかはない。しかしこれについても後に検討することにした。

[5-6] この結集記事の中に阿難の過失に対する問責が含まれる。摩訶迦葉と阿難の間には、何らかのわだかまりがあったのではないかと想像されないでもないが、この問題は【9】において摩訶迦葉と阿難の関係について考察するので、これに譲りたい。これは釈尊の葬儀を摩訶迦葉が到着するまで待たせたのが、阿難ではなく阿那律であったのではないかと想像

されることも係わりあっているかも知れない。

[5-7] ついでに結集は王舎城のどこで行われたかということについて一言しておく。

〈37-1〉 *Vinaya* は「王舎城において雨安居を住し法と律を結集しよう」と提案されたとし、王舎城のどことは書かれていない。しかし後に南山に遊行していたプラーナ (Purāṇa) が王舎城竹林カランダカ園の長老比丘たちのところにやって来て (yena Rājagahaṃ Veḷuvanaṃ Kalandakanivāpo yena therā bhikkhū ten' upasaṃkami)、「よく法と律を結集されました (susaṃgīt' āvuso therehi dhammo ca vinayo ca)、しかし私は世尊から現前に聞き、現前に受けたことを守っていきます (api ca yath' eva mayā bhagavato sammukhā sutam sammukhā paṭiggahitaṃ tath' evāhaṃ dhāressāmi)」と話したことになる。ここから結集が行われたのは竹林園であったことが想像される。〈37-2〉『四分律』、〈37-3〉『五分律』、〈37-4〉『十誦律』、〈37-5〉『僧祇律』はともに「王舎城」とするのみである。

[5-8] ついでにプラーナが「自分は釈尊から親しく受けた教えを守っていく」と言ったとするエピソードについても一言しておきたい。これには〈37-1〉の外に、少し内容は異なるが〈37-2〉と〈37-3〉にも記されている。これらはプラーナが世尊は内宿内煮自煮自取食などを許されたのを親しく聞いたと主張したのに対して、摩訶迦葉がそれは飢饉という特殊事情にあったからであって後に禁止されたと反論し、プラーナは世尊が一度制されたものを覆すようなことはない、というような議論があったとするものである。

しかしプラーナは〈37-2〉は「如佛所制戒應隨順而學」とし、〈37-3〉は「我忍餘事、於此七條不能行之」とするから、おそらくプラーナは〈37-1〉の言うように、自ら聞いたことを守っていくとして結集の内容の一部を承認しなかったのであろう。ちなみにプラーナは原始仏教聖典において、このエピソード以外に登場することはない。

〈37-1〉〈37-2〉はこの時プラーナが伴っていた比丘の数を500人とする。この数字に特別な意味はないと思われるが、しかし「律蔵」に記録されるほどであるからそれなりの事件であったのであろう。このエピソードからは摩訶迦葉が行った羯磨に参加していない弟子グループもあって、参加していない者は参加していない羯磨によって決定された事柄には従う義務がなかったということが知られる。

そもそも仏教のサンガは、釈尊が弟子たちにそれぞれが三歸戒ないしは白四羯磨によって弟子を取ってよいと許されたことに淵源する。釈尊は布教活動の最初期の時点から、自身のもとの中央集権的な組織を作らないことを鮮明にされていたのである。したがってそれぞれの現前サンガはそれぞれの現前サンガの意志によって運営することを原則とする。「律蔵」に規定されたサンガ運営方法は、このレベルでのサンガ運営方法なのである。あるいは釈尊が存命されていた時点では、これら現前サンガを統括する精神的な紐帯としての四方サンガも機能していたとも考えられるが、それは「律蔵」では検証できない。したがって極端に言えば、摩訶迦葉の行った結集の羯磨は、摩訶迦葉が選定し呼び集めた500人の弟子たちが行ったものであって、その時参加していなかった弟子たちを含む、すべての釈尊の遺弟たちに例外なく強制力を持つものではなかったということは十分に理解できる。摩訶迦葉の行った結集は、遺弟たちの多数派ではあったであろうけれども、釈尊の弟子たちの全部ではなかったことは先のプラーナによって明らかである。そのときの結集が「500人の阿羅漢」によってなされたという伝承それ自体が、そのサンガの権威を宣言しなければならない状況下にあっ

たということを如実に物語る。

しかしこれはもちろん「破僧」を意味しない。むしろこのような事態は、現前サンガを基盤とする釈尊教団の形態そのものの中に内在するものであって、特別取り立てて論議されなければならないようなものではなかったであろう。したがって「破僧」には特別に神経質な「律蔵」にあっても、このエピソードはさらりと書き流されており、これを記さない律蔵さえあるのである<sup>(2)</sup>。

しかしわれわれが有している原始聖典は、この結集において集められたものであるということは十分に認識されなければならないであろう。極端な言い方をすれば、現在まで伝えられている仏教は摩訶迦葉一派の伝えた仏教（摩訶迦葉仏教）ということになる。少なくともわれわれが持っている原始聖典には、この結集を主宰した摩訶迦葉の意向が相当程度に混入している可能性があり、そうだとすると、これから検討していくことになる摩訶迦葉エピソードが果たして客観的な視点で描かれたものであるかという疑問を絶えず、持っていることは必要であろう。原始仏教聖典に描かれる摩訶迦葉像は、普通の弟子の域を超越した特別なもの、あるいは異常なものが付与されていることが否定できず、その理由はこんなところにあると考えると、納得できるものがあるのである。このことは徐々に明らかになるであろう。

(1) 塚本啓祥著『初期仏教教団史の研究』（山喜房仏書林 昭和41年3月）の第Ⅱ篇参照

(2) 拙著『初期仏教教団の運営理念と実際』（国書刊行会 2000年12月）の第3章「破和合僧と部派」を参照されたい。

[6] 次に上記の事柄に関して、B文献の資料から関連する部分のみをピックアップして調査してみたい。

[6-1] まず、なぜ摩訶迦葉が結集を主宰することになったのかということについて調べてみよう。その理由を〈37-1〉DN.-A.、*Samantapāsādikā* は摩訶迦葉自身の自覚として、釈尊の糞掃衣と交換したこと（〈14-1〉SN. をさす）と、釈尊が摩訶迦葉は自分と同じ禅定を得ていると讃えて下さったこと（〈12-1〉SN. をさす）を思っていることとしている。しかし「70万人の比丘のサンガの上座摩訶迦葉長老（*sattannaṃ bhikkhusatasahassānaṃ saṅghatthero āyasmā Mahākassapo*）」とするのは客観的な理由を述べたものと解することもできる。しかし法臘の上からすると、必ずしも摩訶迦葉が最上座ではなかったことはすでに述べた通りである。〈37-3〉『善見律毘婆沙』も摩訶迦葉の自覚を、仏が在世中に所説の法戒を付嘱されたこと、袈裟を交換して正法を護れと言われたこと、禅定において自分と等しいと讃嘆されたことを思い起こしたからとしている。〈23-4〉『毘尼母經』は「かつて王舎城において1,250人の比丘たちと『如來滅後誰能持佛法』と籌を行ったとき、私はこの籌を抜いた。なぜなら論中において辯才に制御する者が無いからである」とし、仏は迦葉を「善哉善哉。迦葉。汝所利益事。除吾一人。其餘聲聞無能及者」と讃められたとするから、これらは迦葉自身が結集の主宰を買って出たというふうに解釈しているのであろう。〈37-2〉『根本有部律』「難事」は、摩訶迦葉が結集を主宰するようになったきっかけを、世尊が滅度をとられ、舍利弗・目連も涅槃に入ったので、正法が滅びることを諸天が悲しんでいることを知ったからであると述べている。

ともかく A 資料においても結集は、スバツダという愚痴蒙昧な老年の出家者の暴言を摩訶迦葉が聞いたことに発するのであるから、摩訶迦葉が自主的に主導したということになる。

そしてその主宰役の任に堪えうると自覚した理由として、世尊の糞掃衣と交換したこと、禪定において世尊と同じ境地に達していると印可されたこと、法を付嘱されたことなどが挙げられるのであって、これらは原始聖典に語られるエピソードであるから、先に書いた原始聖典は摩訶迦葉の一派が伝えたものという、いささか意地の悪い見方に基づけば、これらの原始聖典に語られる摩訶迦葉に関するエピソードそのものが、摩訶迦葉が第一結集の主宰者となった蓋然性を証明しようとしていると解することもできる。

[6-2] 結集を行ったサンガのメンバーとして阿難が選ばれた様子については、〈37-1〉は長老たちから結集するための比丘を選ぶように依頼されたので、499人を選んで一人足りなくした。阿難は有学ではあったけれども彼が世尊から八万二千の法門を受けている (*Therag. vs.1024*) からであり、阿難を非常に信頼していた (*ativiya vissattho ahoṣi*) からであるとする。また結集の前日に阿難が阿羅漢になったきっかけは、ある比丘らの「このサンガにおいて1比丘が生臭さをただよわせている (*eko bhikkhu vissagandhaṃ vāyanto vicarati*) 」という言葉に発奮したからであり、これを知って摩訶迦葉は賛辞を贈った (*sādhukāram adāsi*) としている。これは摩訶迦葉と阿難の関係を非常に良好なものであったと解釈しているわけである。

〈37-3〉は阿難はまだ学地にありその資格はないが、阿難なしに法の結集はできないので加えられたとし、〈37-2〉はこの時阿難はまだ学地にあったが、世尊の侍者として仏の法蔵をあまねく受持するからというので白二羯磨によって行水人として指名された、とする。また摩訶迦葉は呵責すれば悟りに資するであろうと考えて、一緒に結集はできないと衆中から追い出そうとした。このとき①汝知世尊不許女人性懷僞諂而求出家、②於佛所不爲衆生請佛世尊住世一劫、③世尊在日爲説譬喩。汝對佛前別説其事、④世尊曾以黄金色洗裙令汝浣濯以脚踏振衣、⑤以濁水奉佛、⑥小隨小戒が何であるか問わなかったこと、⑦俗衆中對諸女前現佛陰藏相、⑧輒自開佛黄金色身示諸女人、彼見佛身即便淚落霑汚尊儀という過失を問詰した、とされている。阿難は発奮して阿羅漢を得た、とする。これらは必ずしも、摩訶迦葉が阿難を信頼していたと解釈しているとは読めない。

したがってこれらからも、摩訶迦葉と阿難の関係についての確たるイメージを得ることはできない。

[6-3] 王舎城において結集を行うことを決した羯磨の行われた場所は、〈37-1〉 〈37-2〉 〈37-3〉ともにクシナーラーであったとするが、〈37-4〉『毘尼母經』では結集を提案したのは王舎城耆闍崛山竹林精舎においてであったとされている。A文献を調査した際に述べたように、やはりこの羯磨はクシナーラーで行われたと考えるほうが自然であろう。

[6-4] 結集が王舎城のどこで行われたかについては、〈37-1〉は「ヴェーバーラ山 (*Vebhāra, Skt: Vaibhāra*) 腹の七葉窟 (*sattapaṇṇi guhā*) の入り口に建設された集会堂」とし、〈37-2〉は「畢鉢羅巖下」、〈37-3〉は「先底槃那波羅山の禪室門辺の講堂」とし、〈37-5〉は「耆闍崛山の帝釈巖」とする。ちなみに「ブツダチャリタ」は「山の側面 (*ri yi logs*) 」<sup>(1)</sup> とするのみである。〈37-4〉は竹林精舎であると示唆している。「先底槃那波羅山」は‘*Saptaparṇa*’の音写語であろうか。しかしこれは山の名ではなく「窟」の名である。霊鷲山は王舎城の南東にある山で、ヴェーバーラ山は王舎城の西にある山である。現在七葉窟とされる洞窟や *Pippalastone* と呼ばれる岩があるのはヴェーバーラ山である。もち

ろんはっきりした証拠があるわけではないが、これらの地点は大勢の比丘たちが集まって会議をするような場所ではないから、おそらく結集のために過ごされた雨安居の場所は竹林園であったであろう。雨安居を過ごすためには、入安居するときその過ごす場所を指定しなければならず、しかも露地では許されない。また 500 人の阿羅漢が雨安居を過ごすために、他の比丘はその年の雨安居は王舎城では過ごさせないようにしたというのであるから、こういうことを考えると、結集の場所は竹林精舎とせざるを得ないであろう。ただし七葉窟でも、畢鉢羅巖でも竹林精舎からそう離れた所ではないから、雨安居は竹林精舎で過ごしたとしても、会議はそこで行ったということ想定しているのかも知れない。

[6-5] 結集が行われた年は、いずれも釈尊の入滅された年の雨安居時であるとする。

〈37-1〉は次のように言う。釈尊が入滅された最初の 7 日間は遺体を供養し、第 2 の 7 日間は荼毘に付し、第 3 の 7 日間は舍利を供養して、このように 21 日間で過ぎてジェット月の白分の第 5 日に舍利を分配し、白二羯磨によって王舎城において雨安居を過ごしながらか法と律を結集することを決定した。そして摩訶迦葉は比丘らに「友よ、今、汝らには雨安居まで 40 日間の猶予がある。その間にそれぞれが障害を断ち切っておけ」と言って、自らは王舎城に向かった、としている。また「雨安居の最初の 1 ヶ月間は王舎城の十八大精舎の修理を行い、中間月に結集を行うことになった」とする。

〈37-3〉も如来の涅槃より 7 日間は大会を、次の 7 日間は舍利供養を行い、雨安居までに 1 半月になったので、比丘たちは王舎城に向けて出発した。そして「夏初の 1 月は王舎城の十八大寺を修治し、結集は中月 2 日（割注にて 6 月 17 日）に開始された」とする。〈37-2〉は年度については触れないが、「前夏中に臥具がなかった畢鉢羅巖を整備し、後夏中に結集が行われた」とする。これも入滅の年を想定しているものと思われる。

〈37-1〉や〈37-3〉が言うように、釈尊の入滅は 2 月 15 日であって、4 月 16 日からの入雨安居までには 2 ヶ月しか残されていない。当時のクシナーラーは、阿難がなぜこのようなところで入滅されるのかと尋ねたことから推測されるように<sup>(2)</sup>、あまり大きな町ではなかった。だから大勢の比丘たちが雨安居を過ごす条件は満たしていなかった。そこで王舎城に行って雨安居を過ごしながらか法と律を結集を行うことが決定されたのであって、だから結集が行われた雨安居は釈尊入滅の年の雨安居であったであろう。500 人は大げさであろうが、たくさん比丘たちが少なくとも 3 ヶ月の雨安居を、それも突然に行うとすれば、大都市であってしかも仏教に好意を持っている大旦那がいるということが条件となるであろう。王舎城はその条件を満たすものであったがゆえに、王舎城において行われることになったのである。

[6-6] 結集を行うようになった羯磨は、〈37-1〉〈37-2〉は白二羯磨であったと明記している。

[6-7] 大乘経典や中国文献に記されている結集の場所を紹介しておく。『大智度論』（大正 25 p.068 上、p.078 中）は王舎城耆闍崛山とし、『仏頂尊勝陀羅尼經教跡義記』（大正 39 p.1015 上）も耆闍崛山とする。『大乘法苑義林章』（大正 45 p.268 上）は「竹林中有大石室。大迦葉波結集之處。未生怨王。為結集者建諸堂宇。即山城北門外西南山之陰。真諦云王舎城七葉巖。集藏伝云僧伽尸城北。三説同也。大智度論云耆闍崛山結集者非也」と解釈している。『釈氏稽古略』（大正 49 p.754 上）は王舎城双樹間とする。

(1) 北京版 Bstan-'gyur Skyes-raba Ņe , 123b2、梶山雄一等訳『ブツダチャリタ』第 28 章 第 59 偈（講談社「原始仏典」第 10 巻 昭和 60 年 12 月）p.326

- (2) *DN. 016 'Mahāparinibbāna-s.'* (vol. II p.137)、『長阿含』002「遊行經」(大正01 p.021上)、白法祖訳『仏般泥洹經』(大正01 p.169上)、失訳『般泥洹經』(大正01 p.184下)、法顯訳『大般涅槃經』(大正01 p.198下)、*Mahāparinirvāṇasūtra* (p.292)